



TITLE:

<批評・紹介>珠榮嘎校注「阿拉坦汗傳（蒙文）」

AUTHOR(S):

若松, 寛

CITATION:

若松, 寛. <批評・紹介>珠榮嘎校注「阿拉坦汗傳（蒙文）」. 東洋史研究 1985, 44(1): 160-164

ISSUE DATE:

1985-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154099>

RIGHT:

の問題關心の所在についての發言にすぎり、多少とも關心のある貴族制と關する部分に焦點をしぼらざるをえなかった——それもまた生半可なものにおわつてしまつたが——。そのため、論評がきわめて偏頗なものになつてしまつたことを讀者と、そして何よりも著者におわびしたい。本評によつて本書の意義が矮小化されるようなことのないことを切に願うものである。

氏は後記であたらしい地平にむけて、今後の課題をみずから意欲的に設定しておられる。それらもふくめ、氏がますますその研究を發展させられることをお祈りするとともに、二十餘年の學的蓄積に非才の身をもつて妄評をくわえたことをおわびして、筆をおきたい。

一九八四年二月 京都 同朋舎
A 5 版 五九四頁 一二〇〇圓

珠榮嘎校注

阿拉坦汗傳(蒙文)

若 松 寛

本書は明末、内蒙古土默特(Tümed)部主阿拉坦汗(俺答汗。Altan qayan. 一五〇七—一五八一年)の蒙文傳記抄本の影印版と校注翻刻版とから成る。

この傳記の原名は、『Erdeni tununal nereti sudur』(『寶の澄明と言う名の史書』)と言うが、又『Erdeni toli nereti quiyang'ui qadi』(『寶の鏡と言う名の總傳』)と『Caggravari altan qayan-u turyu』(『轉輪王アルタン・ハガンの傳記』)とも稱する。

その撰者は名不詳であるが、記述の内容から見てアルタン・ハガンの側近に居た、佛教に明かるい人物(多分ラマ僧)と考えられる。

成書時期は、珠榮嘎(Jurunga)氏の推定では一六〇七年春とされる(本書、校注者序文、三頁)。その論據は概ね以下の如く記されている。即ち、傳記中に記された最も遅い紀年は丁未の年(wayan gonin 三、萬曆三十五年、一六〇七年)であるから、成書時期もこの年もしくはそれ以降と言ふことになる。ところで本傳記中にはダヤン・ハガン(Dayan qayan)、サイン・アラク・ハガン(Sayin alay qayan)、アルタン・ハガン、センゲ・ドクグレン・ハガン(Senge dügüren qayan)の歴代ハガンが高位を繼いだ年と歿年とをいずれも明確に記しているのに反して、ナムタイ・セチエン・ハガン(Namtai seen qayan、明史籍に言う扯力克)に關しては唯その高位を繼いだ年(丙戌の年、萬曆十四年、一五八六年)のみを言つて、その歿年を記していない。ここから本傳記がナムタイ・セチエン・ハガンの在位中に書かれたことが明らかとなる。『明史』神宗紀に據れば、このハガンの歿年は萬曆三十五年夏四月壬子(二十日)である。これより見ると、本傳記の成つた年は萬曆三十五年(一六〇七年)春である可能性が非常に濃い。以上のように同氏は論じておられる。

周知の如く、從來明代蒙古史に關する最古の蒙文史書と目されて來たのは、一六三〇年代成書と推定される撰者不明『アルタン・トブチ(黄金史綱)』(Qad-un ündüsün quiyang'ui altan tobi)である。これに比し『阿拉坦汗傳』は更に約三十年も古いことになる。明代蒙古史に關する最古の蒙文史籍と言ふことになる。

本傳記は抄本の形で存するが、これを所蔵するのは中國でも内蒙古自治区社會科學院歷史研究所のみである。モンゴル人民共和國にはこの文獻は存しないものと察せられるから (Цыгуния Дарай, 《Монголия в XIII-XIV веках》 Москва, 1983, стр. 14) 文字通り天下の孤本と言えよう。

本傳記は我が國でも實は十五年以上も前からその内蒙古自治区での存在のみは知られていたのであるが、以後これに關する詳しい情報を得られぬまま最近にまで到了。六年前、『全國蒙古古舊圖書資料聯合目錄』(八省區蒙古語文工作協作小組辦公室編、內蒙古人民出版社、呼和浩特、一九七九年)が現れて、その第三一〇—三一頁に本傳記も著録されたので、ようやくその素性を垣間見ることができた。一九八一年夏に筆者は中國蒙古史學會一九八一年年會及學術討論會に招かれて出席したが、その折、珠榮嘎氏から直接に本傳記出版の爲、校注テキストと影印版とからなる原稿を北京の民族出版社に引き渡し濟である旨を教えられた(拙稿「中國蒙古史學會一九八一年年會及學術討論會參加報告」『モンゴル研究』第十四號、一九八三年、參照)。爾來その刊行を一日千秋の思いで待つこと三年有半、今年春節閑近に同氏から刊行されたばかりの一本を惠與されたのである。この場を借りて同氏に深甚なる謝意を表するものである。

珠榮嘎氏は八一年當時內蒙古社會科學院蒙古史研究所(現歷史研究所)副所長の要職にあられた。八三年秋筆者が再びお會ひした時は、近く六十一歳となるので退休して、明代蒙古史事典の編纂に精力を傾けたいと抱負を語っておられた。その事典完成の晩には江湖の好評を博するであらうことは疑いない。同氏には明代蒙古史に關

する幾多の論文があるが、就中ここに特記すべきは『阿拉坦汗傳』を驅使して成った左の論文である。

「從《俺答汗傳》看三娘子的名字和母家」(『中國蒙古史學會論文選集(一九八〇年)』中國蒙古史學會編、內蒙古人民出版社、呼和浩特、一九八一年、所收)。この論文では、アルタン・ハガンの妻の有名な三娘子について、これが *Jirgaci gaciin* と呼ばれた者であることを確認した上で、その出自はオイラトの *Kiyud* 部首領 *Jirgaci gaciin* の娘であったことを明らかにして、漢籍中のアルタンの外孫女とかアルタンの孫の嫁とか、果ては宣大妓女とする説を駁している。以上に關する考證は實に周到で閑然するところがない。

同氏の他にも、『阿拉坦汗傳』を論文中に利用した中國人學者が兩三年來俄に目立って來ている。それらの人の論文を思いつくままに擧げてみても左の如く多彩である。

榮麗貞「略述阿勒坦汗」(『中國蒙古史學會論文選集(一九八〇年)』、李濟雲「大明金國」考)(『內蒙古社會科學』一九八二年第六期)、同「呼和浩特建城命名年代考」(『內蒙古社會科學』一九八二年第三期)、奇格「一部珍貴的古代蒙古法律文獻《阿勒坦汗法典》」(『內蒙古社會科學』一九八三年第六期)、薄音湖「俺答汗征兀良哈史實」(『蒙古史論文選集』第二輯、呼和浩特市蒙古語文歷史學會編印、呼和浩特、一九八三年。原載「內蒙古大學紀念校慶二十五周年學術論文集」一九八二年)、同「俺答汗征衛郭特和撒拉衛郭爾史實」(『蒙古史論文選集』第二輯。原載「內蒙古大學學報」哲學社會科學版、一九八二年第三、四期)、同「達延汗生卒即位年考」(『蒙古史論文選集』第二輯。原載「中央民族學院學報」一九八二年第四期)。以上の中、薄音湖氏の三本の論文はいずれも『阿拉坦汗傳』を眞

正面に据えてその關係記事に考證を加えたものである。就中注目すべきは「達延汗生卒即位年考」で、本傳記に據れば、達延汗（把禿猛可）の年代は成化十年甲午（一四七四年）生、十六年庚子（一四八〇年）即位、正德十二年丁丑（一五一七年）死と見なければならぬ。同氏は『蒙古源流』、『アルタン・トブチ』等の蒙文史籍の他、豊富な漢文史籍類をも彼此検討した上で、結論として『阿拉坦汗傳』の傳える年代に全面的に左袒しておられる。この問題に關する限り、『阿拉坦汗傳』と『アルタン・トブチ』の各三つの紀年は互いに僅か一年の差があるだけに反し、『蒙古源流』はその差が著しく大きいと言わざるをえない。

『阿拉坦汗傳』の書誌的解題に關しては、既に留金鎖氏に精細な研究がある。それは下記の書に收められている。Liu Jin—siwe nayirjulan jokiya, Arban yurba—arban doloduyar jayun—umongrol-un teike bicilge (Öbör mongrol-un arad-un kebelün qoriya, Kökeqota, 1979)（留金鎖編著『十三世紀—十七世紀蒙古歴史編纂學』内蒙古人民出版社、呼和浩特、一九七九年）。本書中の第二章が専らこの爲に充てられ、實に四十二頁に及ぶ長篇を成している。ここでは特に本傳記の記述内容の紹介に頗る留意しておられるので、本傳記を利用しようとする者にとって必讀の文獻であろう。實は本傳記の文體は韻文體であつて、美辭麗句を連ねたばかりか、佛教的潤色も加わつて、難解な語句が決して少なくないのである。この意味からも劉氏の論文を豫め讀んで、傳記の概容に通じておくのが傳記研究への捷徑であらう。

さて『阿拉坦汗傳』自體の解題に話題を戻すと、本傳記抄本は貝葉式の紙に竹筆で書寫したもので、その枚數は五十四葉（即ち百八

頁）から成る。文章は段落を分かつたず續けざまに書いている。蒙古文字の發音を表わす *n* や *r* の點の如きは一切用いられていない。この事は古い蒙古書體の特徴を遺しているものと言える。

撰者がその執筆の爲に利用した資料としては、珠榮嘎氏の序文（五—七頁）に依れば、傳記の記事に基いて二種が知られる。その一種は、撰者自身の見聞した類である。他の一種は、ウラン・タンガリク・ダユン・ヒヤの著述（*Uran tangraiy dayun kiyayin jokiya*san）なるものである。この人物は、アルタン・ハガンには義理の子に當たり、『萬曆武功錄』俺答列傳中に活躍を傳えられる恰台吉に比定されている。この比定は十分な論據を擧げて説得力に富むものである。但しこの人物の著述なるものは今日まで發見されていない。

本傳記の内容について言えば、記述の順に次の六項に分類され、而して各項共年を追つて敘述されている（劉論文に據る）。

- (一) チンギス・ハガン以來、蒙古地方への佛教弘通の略史
- (二) ダヤン・ハガンの略傳
- (三) アルタン・ハガンの生涯
- (四) アルタン・ハガンの子ドウダレン・センゲの世
- (五) アルタン・ハガンの孫ナムタイ・セチェン・ホントアイジの世
- (六) 跋語

内容上、本傳記の中心部分を成すのが（三）であることは言うまでもない。ここではアルタン・ハガンの生涯の事蹟を編年體で詳細に述べているのである。

既述の如く、本傳記は韻文體であるが、それは頭韻を踏んだ四行

詩が基本型である。但し抄本では段落を分かつ續けざまに書かれていることから、珠榮嘎氏は校注翻刻版において段落を分け、しかもnやアの點を付しておられる。この御蔭でこのテキストは頗る読み易いものとなった。付注も又蘊書を傾けたもので、その數實に三百七十餘條に上り、いずれも適切にして有益である。一例を挙げると、本テキストに左の如き一節(三九一四〇頁)がある。

köke morin jile tegüni qoyin-a mergen jinong, alan qayan
goyayula.
ködeküti yeke čerig-iyen abçu singula-bar daban ayalaju.
köke nayur-un jurbaljin neretü jajar-a uyırdı-daylaju.
körjintei-e köke qonin jile esen tügel bayırsan ajıru.

(青馬の年に、その後メルゲン・ジノン、アルタン・ハガン兩人は、

出動した大軍を率いてシンフラを越えて行軍し、

青海のグルバルジンという名の地にウイグトを征伐して、
表皮のごつごつした青羊の年に、平穩無事に凱旋した。)

注釋に概ね次のように言う。

青馬の年は甲午の年、嘉靖十三年(一五三四年)に、青羊の年は乙未の年、嘉靖十四年(一五三五年)に當たる。グルバルジンは漢語で三角城と言ひ、今の青海省海晏縣治である。『世宗實錄』嘉靖十五年正月〔丙子〕に、總制陝西三邊尙書唐龍は、メルゲン・ジノン、アルタン・ハガン等のこの度の西征に就いて回顧して、「先年虜酋古囊等。……乃別遣五萬騎。由野馬川渡河。徑入西海。襲破亦不刺營。收其部落大半。惟卜兒孩所領餘衆脫走。此以夷攻夷。誠中國之利也。」と言っている。

尙ここに見えるシンフラはアルタン・ハガンが西征の際必ず通過した地であるが、これに就いても別の箇所で言う。

亦シンフル(Singqur)とも記す。烏拉特中后聯合旗の新忽熱公社(Singqur ngedul)附近を指す。シンフラを越えたと言ふのは、シンフルの地を経て西部陰山(Qangrai ayula)を越えたのを言うのである。(三六頁注③)

こうした例からも窺われるように、注釋は實に周到であり、教えられるところが多い。

校注翻刻版に就いて注文を一つだけつけると、本文中に抄本の頁數を記入していただきたかったと思う。これがないので、影印版との對照が頗る不便を來たしている。尙本文第一八三頁中の左の文章は恰かも原文かの如くに組まれているが、校注者の注記であるから欄外に出した方がよい。

《Erdeni tunumal neretü sudur orosiba》と言う本書は、錫林郭勒盟(Shiyin pool ayimay)の西烏珠穆沁旗(Baryun jününčin qosırun)の王府から得たのである。以下に有る西烏珠穆沁旗の王公の家の世襲〔の記事〕は、西烏珠穆沁旗の人が本書の末尾に付け加えたものであることは確實である。これは本書と關係のない類ではあるが、一頁分だけなので、この後に付した。

この記事から、本傳記抄本は西烏珠穆沁旗の王家に代傳えられて來たものであると察せられる。

最後に、影印版に就いて意見を述べると、その實寸法(一五×九・七厘)が小さい上、用紙もあまり上質でないため、文字の判讀に苦しみ箇所が少なくないのが惜しまれる。本書自體をB5判程度にし

てあったら、影印版もこれに伴って読み易いものになっていたであらう。

『阿拉坦汗傳』は明代蒙古史書中の白眉である。今後の明代蒙古史研究もこれを抜きにしては最早立ち行かないとすら思われる。われわれ蒙古史學徒にとつていわば幻の書であったこの史書が珠榮嘎氏の粒粒辛苦の御蔭でついに公刊に到ったことは誠に喜ばしいことである。ここに改めて同氏の勞に心からの敬意を表する次第である。

Jürongr-a kinaju tayiburlaba, Erdeni tunumal neretu
sudur orosiba, 247 pp., Ündüsün-ü keblel-ün qoriya,
Beijing, 1984.

莊吉發著

故宮檔案述要

神田信夫

—

私は數年前に『清代史の研究と檔案』（『駿臺史學』第五十號所載）と題する一文を草し、一九八〇年頃までの清朝の檔案の整理狀況とその公刊について述べたことがあった。その後、最近における明清、特に清代の檔案の公刊と利用はまことに著しいものがある。北京の中國第一歴史檔案館に收藏されている、一千萬件に上るといわれる檔案は、着々と整理が進んでいるようであり、昨一九八四年十二月に出版されたばかりの『清史問題』（Ch'ing-shih wen-t'i）第五卷第二號には、ハーヴァード大學のクーン（P. A. Kuhn）氏が同

館の出版計劃について最新の情報を紹介している。また一九八二年二月には、同館と南京の第二歴史檔案館を主辦者として、『歴史檔案』と題する歴史檔案専門の季刊の雑誌が創刊された。これには每號各種の歴史檔案が句讀を附けて排印されている。その他、例えば遼寧省檔案館所蔵の滿文の「黑圖（hei）檔」が關嘉祿、王佩環兩氏によつて漢譯され、新刊の『清史資料』第五輯に掲載されるなど、まさに應接に遑ない有様である。

一方、臺灣においても清代の檔案の整理と公刊は相變らず盛んで、中央研究院歷史語言研究所現存の清代法制檔案を長年にわたつて研究してきた張偉仁氏は、一九八三年九月『清代法制研究』三冊を出版し、巻頭に二十七種の檔案の原色寫眞を掲載すると共に、百五十六種の檔案を排印して詳しい注釋を施している。しかし現在、臺灣で最も大量に清代の檔案を所有しているのは、言うまでもなく臺北の故宮博物院である。この檔案はがんらい古く一九三三年、北京の故宮博物院から南遷した文獻館のもので、南遷當初は三千七百餘箱あったというが、現在臺灣には僅か二百四箱しか存在しない。ただそれでも各種類にわたつて重要な檔案が含まれているうえ、大變な分量で、四十萬件に上るといわれており、私も曾つて同院の倉庫内に堆高く積まれている木箱を瞥見し、餘りの多さに驚嘆したことであった。

臺灣へ遷された故宮の文物は、初めは臺中市の郊外の霧峯北溝に置かれていたが、やがて一九六五年に臺北市の郊外の士林外雙溪に建物が新築されると、すべてここに引移され現在に及んでいる。檔案の整理は、夙く臺中時代から一部始められていたようであるけれども、本格的に行われるようになるのはやはり臺北に移ってからで